

昭和50年12月

図書館報附録

# 書 想

第14号

中野重治著

## 『本とつきあう法』

木村博一

この本を買ったのは、たしか五月であった。店頭で見つけて求める気になったのは、著者が中野重治だったからである。著者との最初の出会いは『歌のわかれ』であった。戦争中の暗い学生時代のことだっただけに、そこにまぎれもない青春の実相をみてとって、身につまされる思いをしたことを忘れない。大げさにいえば、その時以来著者の名は、私にとってなつかしいものになっている。

夏の一日、この本を読んで久しぶりに読書三昧の楽しい世界に遊ぶことができた。

ここには、著者が読んだ本について語った36篇の文章が集められている。「万葉集のこのへんのところ」「一つの小さな無尽蔵」「にがい親近感」といった標題のつけ方が、いかにも中野さんらしい。

著者は、楽しさ、美しさ、理にかなった正しさを求めて本を読んできたという。その60年に及ぶ読書遍歴のあとが、おのずからわかるようになっているところがいい。

ずいぶん多方面にわたって本を読んでいるのに感心もし、驚きもする。著者は、「忘れえぬ書物」として犀星の『愛の詩集』について語り、「一冊の本」として細井和喜蔵の『女工衷史』にふれ、「私の古典」としてマルクスの『猶太人問題を論ず』をあげる。読書の幅が広いのである。たとえば、「旧刊案内」（この書想でも企画してみたら面白いと思う）で取りあげるのが、川村清一の『食菌と毒菌』や和田英子の『富岡後記』であり、また、栗本鋸雲の遺稿や松倉米吉の歌集であったりする。

はじめて名前を聞く本もたくさんでてくる。それが著者の筆にかかると、ぜひ読んでみたい気持ちにさせられる。読んだことのある本も、再読したい気になってくる。その達意の文章、そのユニークな文体のせいであるだろう。たとえば、土門拳の「筑豊のこどもたち」を紹介した短文を読むだけでも、それはわかる。しかし、それ以上に、本を読むにあたっての著者の誠実さ、直観的に肝どころをおさえ、その最上の部分を引出してくることのできる詩人としての資質が、大きくものをいっているのだと思う。気楽な読み方もすれば（「大航海時代叢書」）いろ

いろひっくりかえして読む（「徳秋水の日記」）、読みかじる楽しみも味えば（「追想天下正男」）『国富論』のように、その内容は忘れても、「理づめ、事づめ」の「その仕事ぶり、その熱心ないそしみ」を楽しむ場合もある。この本は、たくまずしてすぐれた読書論になっている。

「本とつきあう法」には、註や解説についての深い関心、古本に対するあたたかい心くばり、さし絵や装丁をだいにする態度などが示されていて、著者がたんなる読書家にとどまらず、真実の意味で本を愛する人であることをうなづかせる。この種の本には珍しく、本書には、著書自身による親切な解説と便利な索引がつけられている。

「ガリヴァー旅行記」の読み方にふれた一文の中に、次のような味わうべき言葉がある。

いったい何かの文学作品を読んで、それはどこの世界の話でもいい、とにかく読んだあとで、そのほっとした気持のなかで、自然にわが日本のことが考えられ、わが身のことが考えられて、そして何となく、他国もこうなのだ、よその家族もこうなのだ、よその人もこうなのだと考えられ、それにそれぞれの後悔やら、口惜しさやら、よろこびやら、おれもいつまでもこうしてはいらぬぞという気持ちやらにおそわれるとしたら、それはその人が作品をほんとに読んだ証拠なのであって、それでこそその人はその作品を読んだということになるのだ。

著者は「行きずりの気持で」読んでくれれば満足だ、といっているが、たとえば上のような章句があちこちにあったりして、なかなかどうして本書を読みこなすには骨が折れる。しかし、読んでたのしく、いろいろと知的刺激を受けることができる。著者の言葉を借りれば、「本を読む作法」——作法とはまたなんとなつかしいことばであることか——というものについて教えられるであろう。学生諸君の一読をすすめたため。（筑摩書房 1400円）

— 1950.9.1 記

## 東寺の縁日

池田 宏

京都の東寺では毎月21日は弘法さんの日である。この日は縁日として京都近郊は勿論のこと奈良・大阪からも多くの人が集ってくる。これはお寺参りもさることながら寺の境内や、周囲の歩道にならぶ屋台店の賑わしさにさそわれてくるのではなからうか。ここには毎日が目まぐるしく変る現代からかけはなれ、精神的にゆとりのあった昔を思いださせる懐かしさが、漂っているようである。

なるほど、いならぶ屋台店の多いのに驚き、さらに群がる人々の多いのに驚いた。そして、この人達

が昔さながらに振舞っていることである。屋台店には盆栽をはじめ植木が軒を並べる。それから洋服・着物等の繊維関係や、金物・荒物・小間物・はき物類等、日常生活に必要なものはほとんど出揃っている。又食糧品関係では、茶、昆布・穀物・漬物類や、昔の子供がほしがった菓子類等ここにくれないものはない。なかでも最も興味をひくのは骨董であろう。ここでは、一世紀以前の品物が雑然と並べられている。伊万里・有田をはじめ九谷・志野等全国各地の古い陶磁器は誰がみても高価に見える。骨董趣味の人ならつい手にとってみたくなる。昔の貨幣・兜・鐔・仏像仏具・算盤・矢立・楽器・時計・鉄瓶・大工道具類。よくもこんなに集めたものだと感心させられ、多くの人の生活の跡がこの骨董屋の店におさまっているかと思うと一瞬タイムトンネルを通過して昭和の御代を忘れてしまった感じである。昔、自分の家にあった矢立・鉄瓶などが今はこのようにして何処かの骨董屋の店に陳列されているか、或は骨董趣味の誰かの家におさまっているに違いない。1枚五万・十万の皿と並んで徳川時代の歌舞伎役者の色刷版画が外国人には魅力があるのか何回となしにひっくり返して品定めをしている。一方、盆栽植木の店は日頃丹精こめた植物を、一品でも売り捌こうと宣伝これつとめている。結局押しの強い方が勝ちで売られて行く。最近店頭に出ている洋花よりも日本本来の盆栽に人氣が集中し、松・紅葉等が興味のまとなっている。靴屋の前では母親たちが子供にせがまれ比較的安い運動靴を足にあわせて買っている。古着の店では久留米耕のモンペを身体にあわせて店を賑わしている。女の人にとってモンペが着やすいのか、昔を懐しがっているのかその真意は、わからないが………、又、縁日に因んで大原女の売っているダンゴを見物つかれの老人や子供たちがお茶を飲みながら頬張っているのは実にほほえましい。

一日一日近代化されて行く京都に今なお昔のまゝの東寺と、そして月に1回の弘法さんの縁日は私の子供の頃の夜店を思いださせ大変懐しい感がする。ここでは売るものも買うものも昔さながらで、何の体裁も屈託もなく庶民的に一日を過せるのである。数限りない人の波は一日中入替り立替り時をきざんで行く。寺は民衆のものであろうか。御堂を覗くと信者達は周囲のやかましさを聞えないのか一心に御

詠歌をあげている。機会があればもう一度東寺へ行って見たい。

(註)

- 東寺は本名を教王護国寺と云う。伽藍は奈良時代の寺院建築により配置されている。
- 金堂(国宝)は東寺の総本堂で桃山時代の建築。大師堂(国宝)南北朝時代。五重塔(国宝)江戸時代。蓮花門(国宝)鎌倉時代。その他講堂・宝蔵等の重要文化財等がある。

(会計課課長補佐)

## 日本史の周辺

泉谷 康夫

近ごろ本屋に立寄って気付くのは、古代史関係の本が非常に多いことである。中でも多いのが邪馬台国関係の本である。いずれも平易に書かれており、専門家以外の多くの読者を想定したもののようである。これらがどの程度読まれているのか知らないが、次々に出版されているのであるから、ある程度は売れるのであろう。古代史ブームというのであろうか。

20年ほど前、私は、映画の企画をしている人から、戦国以後の時代ものだと観客はよく入るが、それ以前のものになると全く興行成績があがらないという意味の話聞いたことがある。古代史ブームにかかわらず、今でも時代劇映画やテレビの時代劇はそのほとんどが戦国以降を舞台にしている。従って、このような傾向はいっそうに改まっていないといえるようである。このことは、時代劇に人々が求めるものと、古代史に人々が求めるものが全く違っていることを示しているようである。

最近のテレビドラマの一つのパターンとして、悪徳商人が幕府の役人と組んで利益を独占しようとするが正義の士によってあばかれ殺される、というのがある。悪徳商人を現在の大企業、幕府の役人を汚職議員や官吏におきかえてみよう。現在の話になると正義の士はそう簡単に現れない。しかし昔話にしてしまえばスーパーマンの正義の士が現れても見る人にそれほど不自然さを感じさせない。人々はその活躍によって僅かに現状への鬱憤をはらすことになろう。NHKの捕物帳はもう少し手がこんでおり、スーパーマンは現れない。大きな壁につきあたり苦

悩める庶民がえがかれる。ここでは人々は多大の共感をもってみることになる。こんなことを書いたのは、時代劇に現れる人物はいずれも現代の人間だということがいたかったからである。少しいい方を変えると、時代劇の—時代小説でも同じであるが—特色は現代人のものの考え方に迎合しているところがあり、それがないと失敗するということである。現代の人間が活躍する場であるから、新平家物語を書いた吉川英治のような才能のある人以外は、その舞台があまり遡っては具合が悪く、戦国以降しか時代設定ができないのではないかと私は思っている。

最近、歴史学研究室宛に邪馬台国に関する自著を紹介した私信が届いたが、それには「小生この度、数年来の研究をまとめた〔古代史推理〕の本を出しましたので、ここにご案内申し上げます」と記されていた。著者は専門の歴史家ではないようである。この私信に明確に示されているように、多くの人々の古代史への関心は、どうやら推理の面白さにあるようである。極言すると、人々は推理小説を読むのと同じ関心で古代史の本を読み、またみずからも推理する楽しさを味わっているように思われる。

歴史に多くの人々が関心をもつのは歴史を専門とする者にとってうれしいことである。しかし、以上のべたような形での歴史に対する関心のもち方ではあまり喜んでばかりいるわけにゆかないようである。

## モデルの効用

杉 村 健

「三つ子の魂百まで」といふ諺がある。これは、生まれつきの性格は一生変らないという意味であって、人間の発達にとって遺伝の要因が重要であることを強調している。これに対して、「氏より育ち」といふ諺がある。これは、家柄や身分よりも育て方が大切であるという意味であって、環境の要因が重要であることを強調している。これら二つの諺の内容はともに真実であり、心理学においては、成熟と学習の問題あるいは遺伝（生得説）と環境（経験説）の問題として論じられてきた。

この問題について、われわれは成熟や遺伝の要因を無視するつもりはないが、それにも増して、生後のさまざまな経験を通して学び取るもの、すなわち

学習や経験の要因がより重要であると考えている。これまで、単に成熟によるとみなされていた発達現象のいくつかは、外からの働きかけによるものであり、従って、学習の理論によって説明できることが明らかになってきた。

人間の発達を学習の過程としてとらえようとする立場が、最近有力になりつつあるが、その学習は主として強化とモデリングによって行なわれる（北尾・杉村・今井・秦「幼児の精神発達と学習」創元社、1974）。親が子どもをしつけるときに、子どもの望ましい行動を称賛し、望ましくない行動には罰を与え、叱責する。このような強化によって、子どもは望ましく発達すると考えられている。他方、直接的な強化を与えなくても、親や教師、同胞や仲間、あるいはテレビや小説などの人物を模倣することによって、子どもは新しい行動を学び取っていく。これがモデリングによる発達である。模倣の重要性については以前から指摘されていたが、学習心理学の理論的枠組の中で、実験的研究が盛んに行われるようになったのは、ごく最近のことである。

ところで、われわれが研究を進める際には、たとえ自分では気がつかなくても、ほとんどの場合、何らかのモデルが存在している。そのモデルは、優れた理論でもよいし、偉大な学者であるかもしれない。広島大学名誉教授古賀行義博士が編集された「現代心理学の群像—人とその業績」（協同出版、1974）は、心理学者としての、また人間としての生き方について、豊富なモデルを提供してくれる。本書には、すでに物故された日本の大先生5名と、外国人では故人4名を含む21名の心理学が登場している。どれも一流の理論家、実験家であり、主な経歴と理論が述べてあり、特に、新しい理論や着想が生まれた経過が詳しく描かれている。

私の研究とかかわりのある Kendler, H. H. (1919—) は、学習（実験）心理学と発達心理学を統合し、言語的媒介 S-R 説を樹立した偉大な人物である。しかし、彼は大学2年生まではサボリ学生で副学部長からしばしば注意を受けており、その後、すぐれた多くの教授、特に大学院では現代の卓越した学習理論家である Spence, K. W. (1907—1967) というモデルに出会い、一週間に70～80時間の猛勉強をしたという。

教師は学生が勉強しないといつて嘆く。しかし、

われわれ教師が、果して彼らにとって魅力あるモデルであるだろうか。

## ペナレスの朝

(インド仏教美術  
研修旅行の一コマ)

小川清彦

朝霧のかなたにいま昇らんとする真赤な太陽。はてしなくのびてかすむ対岸。そこには悪魔が住むと云う。彼岸とはその薄灰色の地平をさして云うのか。ガンジスの茶灰色の流れに、小舟にゆられて、その彼岸の日の出に合掌する私は、三途の川を渡りかけている唯心の求道者か。いや、まだまだ、いま漕ぎ出した背後の岸に操り広げられている騒々しい現実に未練たっぷりの愚者だ。

ガート(沐浴場)がここに始まって以来、絶えたことがないと云われる、高らかな、ヒンズーの祈の音声が、豊かな川面に増幅されている。正月二日、ヒンズーの聖地ペナレスのガートの朝まだき、太陽に向かって、手を合わせながら、全身を静かに水中に没しては、また頭を出して祈る信者たち。顔を洗い、口をすすいで、婦人たちはサリーを着替え、岸の石段に広げては、原色の長方形の鮮やかな配色のアラベスクを奏でる。舟べりを、重石をつけて、大きくふくらんだ牛の死骸が流れ過ぎて行った。長いガートのはずれの砂地では、井桁に組まれた薪の上に、赤い布に包まれ、舟形の台につけられた死者が置かれて、いま火が燃えあがったところだ。傍らで遺族がひざまずいて泣いている。亡骸は聖なる河に帰るのか。

陽がやゝ高くなり、ガートをあがって、街の雑踏にわけ入れれば、ここはまた、無い物なしの、果物・野菜・小間物・百貨・粗末な木箱を台に連ねての朝の市だ。もぎたてのオレンジをミキサーらしき器にほうり込み、手で押しつぶして、コップをならべている隣りでは、台にあふれるばかりのバラの花売り、その横では、ミカン箱の上に真白にそろった義歯を十ばかりならべて、歯の絵を前に立てた入れ歯屋・鉄と櫛と鏡を足もとに置いてじっとしゃがんでいる床屋。ヒンズーのメッカ黄金寺の露路を列をなして

わがもの顔に歩く牛たち。彼等が落して行く糞に氣をとられて、下ばかり向いて歩いていたら、とうとう牛の鼻づらに衝突してしまった。宿に戻り、遅い朝食を、強烈な火葬の光景に驚いて、ちぢみ上がった胃袋にむりやり押しこみ、次の目的地カジュラホに向かう。

ペナレス郊外の駅に着いて、汽車を待つ間、私達のバスの周囲には、たちまち物売り、物乞い、見物の群衆の垣根が出来た。こちらの方は、目に入るものみな珍しく、あたりを眺めてキョロキョロするが、彼等は遠まきにまず一点に目を据えてジッとこちらをみる。こちらが檻の中の動物のような錯覚をおこす位、ジッとみている。そのうちに、異様な一点に気がついて、今度はこちらが目を凝らす番になった自転車を押して、全裸の赤銅色をした男性が、目の前の広場を闊歩してゆくではないか。私は目をこすって見直した。髪を頭上で束ね白い布で結んでいる。前方正面に来て、彼も私達のバスに気がつき立ち止まってこちらに体を向けた。頭上の白い布以外なものもつけていない。私の視点はしばしそこに釘づけになった。そのうち、その男性は歩き出して、自転車をかつぐと 駅の階段をのぼっていった。バスの中は、我に帰ったように 驚嘆と笑いが入り乱れた。——何者だ、あれは——現代の神話だ——行者でないか——皆笑うけど、もしかしたらタゴール大学の哲学の教授かも知れんよ——いや、インドの原始宗教にああ云うのがあるんだ——など。訪印はこれで三回目という坊さんが、「インドは太陽と自然と人間が渾然と一体になっているんだ」と自信たっぷりに云っていた、その証しを、私はかいま見る気がした。

投 稿 欽 迎

教職員のみなさんの原稿を募集しています。

◎字数1.500字程度